

清正公時代からの伝統で

熊本の味噌・醤油醸造業

熊

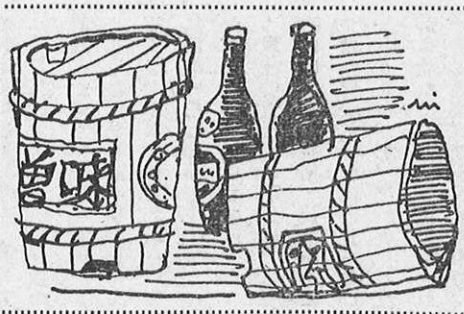
本県の食品加工業は、殆んど全部が中小企業だが、その生産額は、昭和三十四年度の工業統計調査をみると二百四億。これは化学工業（百九十五億余円）や機械金属工業（二十三億円）などを抜いて断然一位だ。

醸

醸造業としての近代的発達をみると、これは明治十年の西南戦役前後特に大正時代から支那事変までが全盛時代。その当時は、九州から遠く朝鮮や満洲まで進出した。現在生産は順調に伸び、昨年度の出荷額は八億六千万円。その七八%が県内、二二%が県外で、沖繩やハワイへも輸出されている。

し

かし、この業界も古い殻を破って新しい時代に応じたものへの転換を余儀なくされている。食生活の変化にともない、バターやマーガリンがハバをきかせてきた。ソースやマヨネーズも進出してきた。「ナーニ、味噌も醤油も日本人の食生活から切りはなすことはできないサ。」など。



どのんきなことを云つてはおれない。これは全国的な傾向。この新時代の波をどう乗りきるか。また、味噌も醤油も品種・銘柄が多様で、それだけに業界の競争も激しいようだ。この過度な競争をどうさばき、どうしづめていくか。

ナ

ンといつてもこの業体は歴史が古いだけに、経営管理も相変らず昔風な考え方に根ざしていることは否定できない。そこで、まず個々の経営の合理化と近代化が大切。さらに協同組合を中心に、過度な競争を避けた新しい経営の確立はもちろん、時代にマッチした新しいアイデアによる新製品

ちよと一言

▼中小企業に勤めている人で、ボーナス時期や退職金をもらう時になって、大企業との差をシミジミ感じる人が多いことだろう。そこで生まれたのが「中小企業退職金制度」

▼二百人以下の従業員をつかっているところが加入できる。（サービス業では五十人以下でよい）。掛け金は毎月二百円から千円までで、これは事業主が従業員のために掛けてやる。

▼二百円掛け十年で、四万六千四百円。千円掛け十年で十八万六千九百六十円。三十年にもなると百六十六万二千円余りももらえる。（掛ける期間が永い程有利）

こうなると従業員たるもの、ハリキラざるを得ない。「事業所の雰囲気グツと明るくなりました。」という事業主もある。

▼くわしいことは、もよりの商工会議所か、労政事務所で教えてくれる。

中小企業でも退職金が支払える

私は千手観音になりたい

—環境衛生監視員のうら話—

小田 洋三



保険屋さん？……

「保健所から参りました」といつて訪ねると、「うちはもう保険には入りましたパイ——」こんなふうには保険の外交員と間違えられたのは昭和二十三、四年頃。まず保健所とはどんな仕事をやる所かをPRする努力から始めねばならなかつた頃を思えば昔日の感がある。

ある日球磨川畔で……

「球磨川の河原に魚の骨や内臓が捨て、あつて臭気ブンプン、はえブンプン」という連絡を受けた。早速現場に行つてみると明かに魚屋か蒲鉾屋が捨てたものらしいのが臭気を放つて散乱している。しかしそれがどこの誰が持つてきて捨てたものやら皆目わからない。

只もう鼻をつまんであさつているうちに一枚の荷札が現われた。結局〇〇魚屋だと出所がわかり、当の魚屋さんによく注意して一応幕となりましたが、話をきくと養豚業の人が毎日集めに来るのが、何かの都合で集めに来ない時がある。そんな時が困る訳だ。

ところがこれも時々肉のつい

た骨等を別に包んでおいて、集めに来た時に渡してやると喜んで。それから順調に集めにきてくれたという話。

これも世渡りのひとつのコツかなと感心した次第。

チリも積れば何とやら

チリ屑など誰か一度捨てたあとは捨てやすくするので、川端等チリの山がでやすい。せつかく、役場で掃除をして立札を建て、この立札さえも引抜いてしまふのは困りものだ。

チリにもまして困るのは糞尿の処理だ。こればかりはどうにも我慢ができないのでついにも一方、汲取りや衛生社が集めても捨て場に困つて、つい川や溝や道端に捨てることになる。当然ながらすぐ苦情がこちらにくる。確かに捨て、あつてもどこのだれの仕業かわからない。私たちの仕事はどうしても県民の皆さんの協力が要になつてくる。

監視員の泣きドコロ

「モグリらしいのが近所の家をサンパツして廻つている。器具の消毒もしてないようだ……」こんな投書があつてすぐ監視に

仕事の夕ネは尽きず

出かけてみてもなかなか現場にいきあわさない。いよいよその根拠地がわかつていつてみると、「家は子供が三人もおり、主人は病気で、どうしても生活保護だけでは生活できまっせん」という訴え。一番苦手な法と人情の板挟み。しかし法を守る公務員であつてみれば、目をつぶつてある程度の処置もいたしかたない。ついほだされてポケットマネーに余裕があれば少しでも……という気持ちにもなる。

秋の花と虫

花 鉄道の駅にはコスモス、町のショウウィンドーには菊の花、病院の庭にはコスモスと葉ゲイトウ。

むかしの秋の七草にならつて、現代の秋の七草が選ばれたことがあつた。そのときの選に入つたのは、菊、コスモス、曼珠沙華、赤のまんま、秋海棠、おしろい花、葉ゲイトウの七種。コスモスを推奨したのは菊池寛で、曼珠沙華は齊藤茂吉であつた。

新「秋の七草」がきまつてから、五百人の女学生に投票させたら、菊が第一位、第二位コスモスが一五九票があつたり、高浜虚子氏の選んだ赤のまんまはたつた一票であつた

秋の虫では鈴虫と松虫が両大関であるが、虫の大家大町文衛氏はコロキが第一といひ「文明国の中で、否世界中で日本ほど美しい声でなく虫にめぐまれてはいる国は外にない」と賛嘆されている。

小泉八雲が「秋は耳の季節だ」といつた言葉をおもいだす。